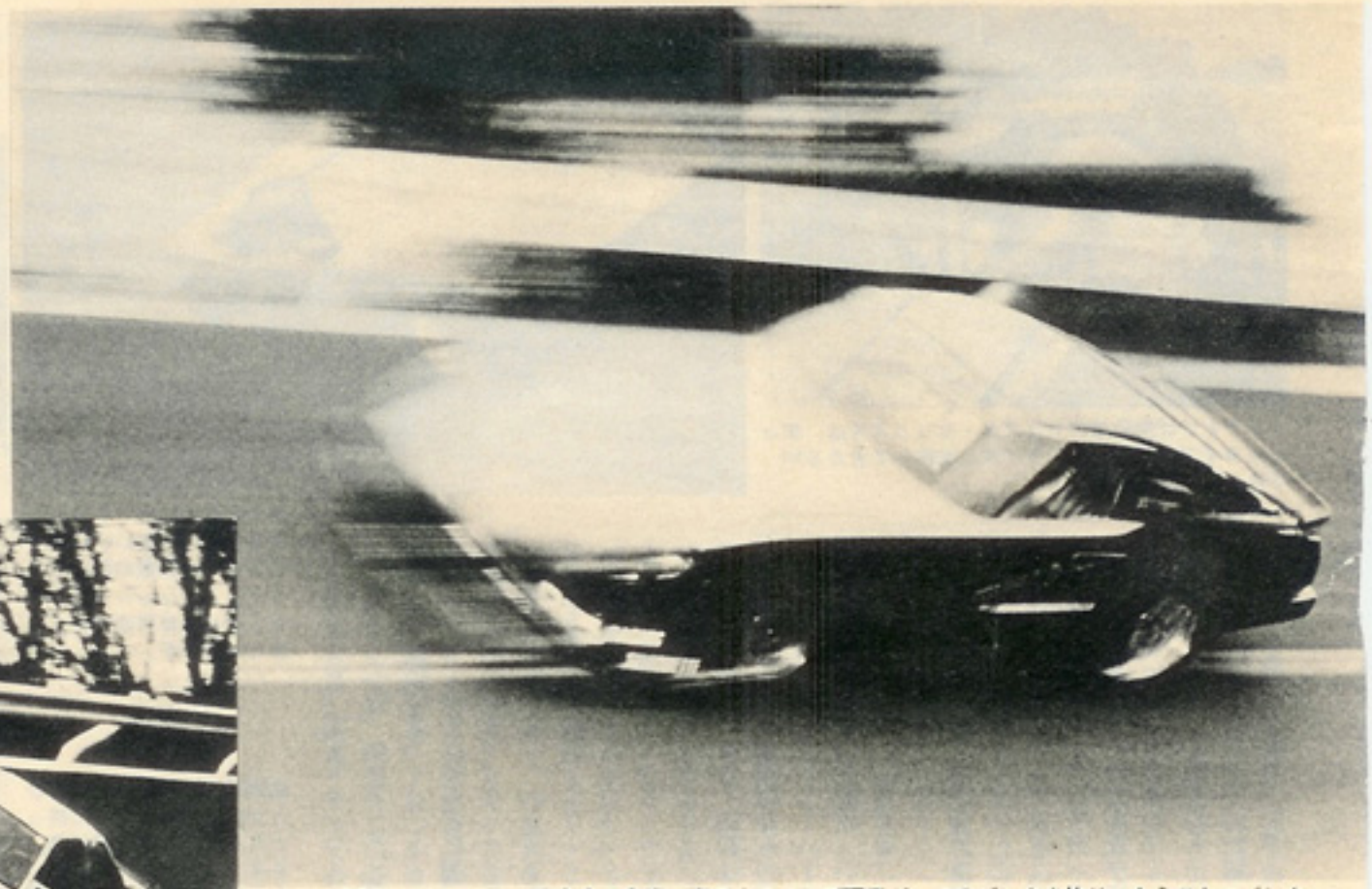
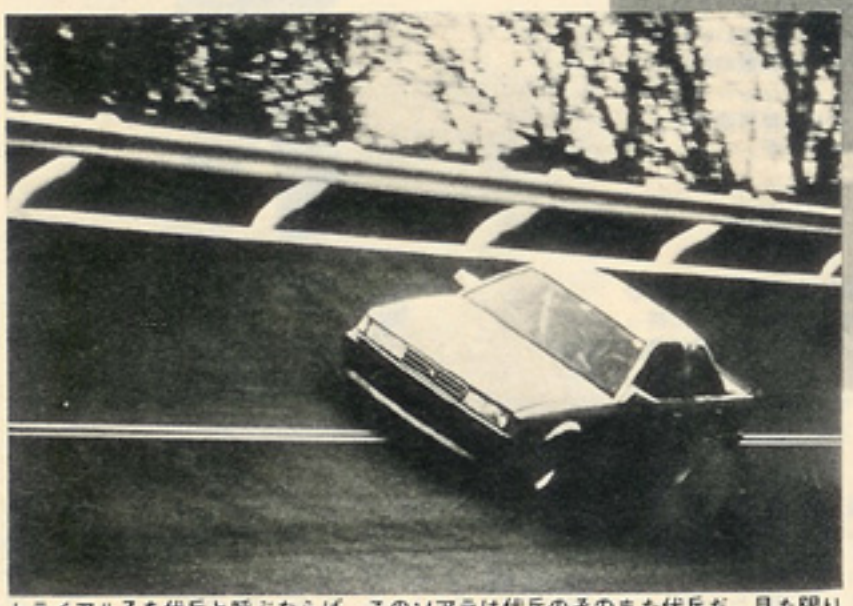
ほとんど終始この顔である。300.751km/hは山本氏にとって、周囲と半分以下の価値しか持たないのかも知れない



これこそ我々にとっては、FOCUS真っ青の大スクープ写真だ。このバンクを抜け、もうひとつバンクをクリアし、そして国内最高速の達成だ



トライアルZを伏兵と呼ぶならば、このソアラは伏兵のそのまた伏兵だ。見た限りはRSヤマモトZ以上に、ただのソアラだ

300km/hとのコミュニケーション
——裏ストレートからの声——

待望のオーバー300km/h。この瞬間を、いつもは立入ることが少ない裏ストレートで迎えたスタッフは、熱っぽく語っていた。

「北バンク入口で307km/hを印したピットボードを掲げると、パッシングと、軽く手を挙げて応えてくれた。こっちも誰もいないところでずーっと待っていたから、ホントにウレシカッタゼ。」

裏ストレートに待機していたスタッフは「あっ！という間に通り過ぎちゃったし、無線がないので何キロ出ているか全くわからなかったヨ。ただ、ドライバーの井上選手が、チラッとこっちを見た時は、出た!!と思った。ホントに一瞬だったけど、ヘルメットの奥の瞳がキラキラと輝いてみえたのが印象的だった。だけどホンネをいうと、とても300kmhを越えているようには見えなかったんだけど、表のストレートに戻ってきたら、みんなが大騒ぎしてるから、こりゃあ、またトラブったな？と思いきゃ、300！300！と、どいつもこいつもニコニコ顔」300km/h超える移動物に乗る人間と、一点に不動の人間の心の繋りがあった。

忘れていない。最高速トライアルにおいては、スタッフは全くの無力なのだ。ただ走行を見守り、待ち、チューナー達の言葉を信じるしかない。

記録誕生！

計測器の設置、参加車両のセッティング等、全ての準備が整い走行開始だ。ドライバーはいつもどおり井上晴男選手。市販車をベースのトライアルでは、唯一エキスパートと呼べる人物である。

一番手はRSヤマモト。フェアレディZのスペックは前回と全く変更なし。これが300km/hを狙うのか、と思わせる地味なシルエットもそのままだ。ドライビング上の注意点を山本氏から確認し井上選手が乗り込む。コースイン。例によって、低く静かなノートを残してバンク内に消えて行く。冬の朝の谷田部、気温が低く澄んだ空気は裏ストレートを走るフェアレディZのエキゾーストノートをはっきりと耳に伝える。再びバンクへ。バンク上端から駆け降りて来るZを確認。計測区間を通過。266・272km/h。あちこちで嘆息が聞こえる。再度周回へ。第1周回は全開走行じゃない。少なくも音の上ではそう聞こえた。来た。100m区間を1・201秒で通過。299・750km/h！ わずか0・25km/h満たず。一斉に「アーッ」と声が上がる。山本氏の顔に笑いはない。わずかに届かぬ悔しさを隠さず顔にあらわしている。第3周回は294・840km/hと落ちる。ここでピットイン。山本氏が駆け寄り井上選手とふた言み言言葉を交わし、エンジンルームへ手をのばす。

続いてトラスト・セリカXX。寸前までセッティングを行なっていたが、本調子ではないのか？ 裏ストレートよりマフラーから白煙を上げているとの報告が入る。ターボチャージャーのトラブルだろうか。そのまま全開走行に移らず2周で戻ってくる。やはりターボだ。タービンのシールよりのオイル漏れ。走行は不可能、完全にリタイアだ。

セリカXXから降りた井上選手は間を置かずに、トライアルのフェアレディZへ乗り込む。谷田部のニュたない。85年は従来どおりのL型とVGの2本立てでゆくつもり。VGはとりあえず2ℓだが、これにも期待している。「記録伸ばしに十分活躍してくれると思う。やはり設計の新らしいものの方が何かと、それなりね。ま、一応はお疲れさんてところだ」

全て市販であることに意味が
——トラスト・大川氏

なんと自らのドライビングで、300km/h男となった大川氏。この日から彼は「クレージー大川」と呼ばれている。

「自分で乗る気はなかったんだけどね。ステアリング握ったら気が変わったよ。とにかく出しました。長い道程だった。セリカの5M-Gはもうエンジン古くなってて、同仕様のソアラは代打ってとこ。できればセリカで出したかった。デフが違うから同速度をソアラより1000回転おさえて走れるし。ソアラに組み込んであるのは全てトラストの市販パーツ。手前ミソだけど市販車と市販パーツでの記録は意味あることだと思うよ。なんでも良けりゃレーサー持ってくればいいんだしね。シート取っ払ったりのわざとらしい軽量化もしてないし。しかしあくまで本命はセリカ。自家用車は壊したくないしね（笑）」